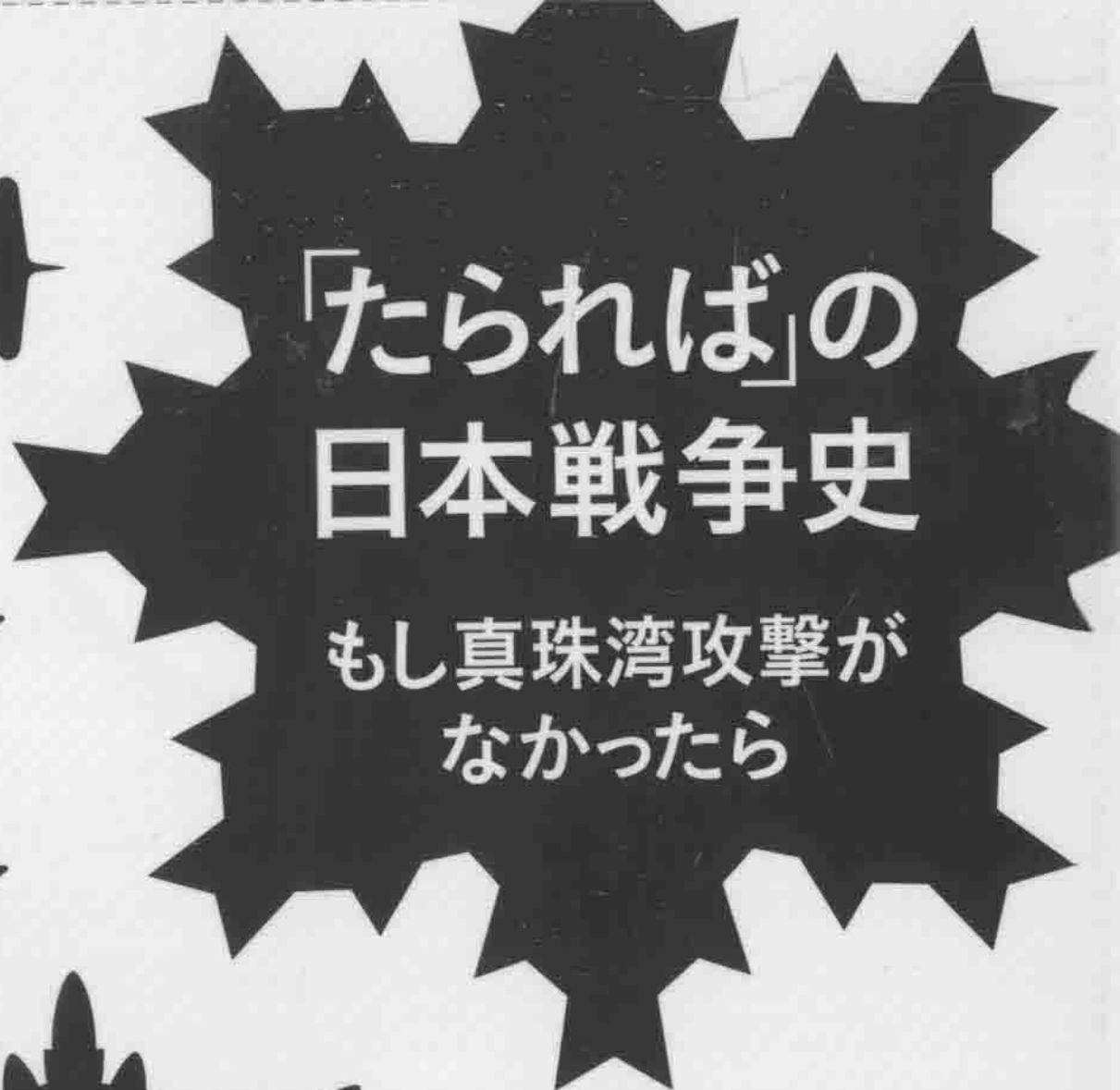
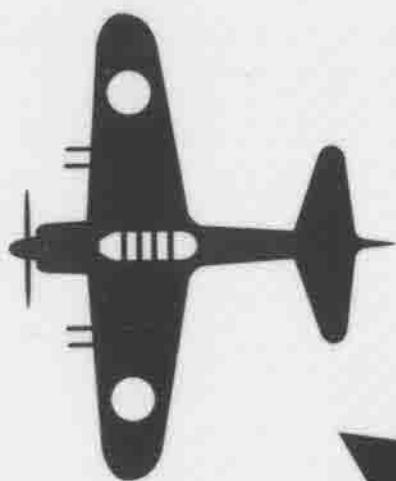




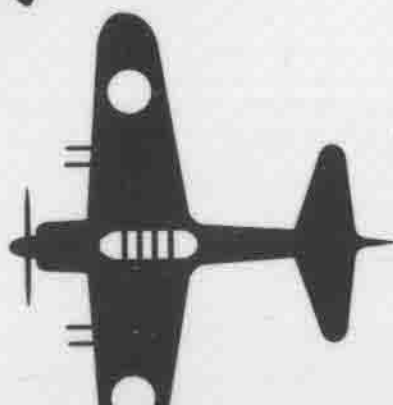
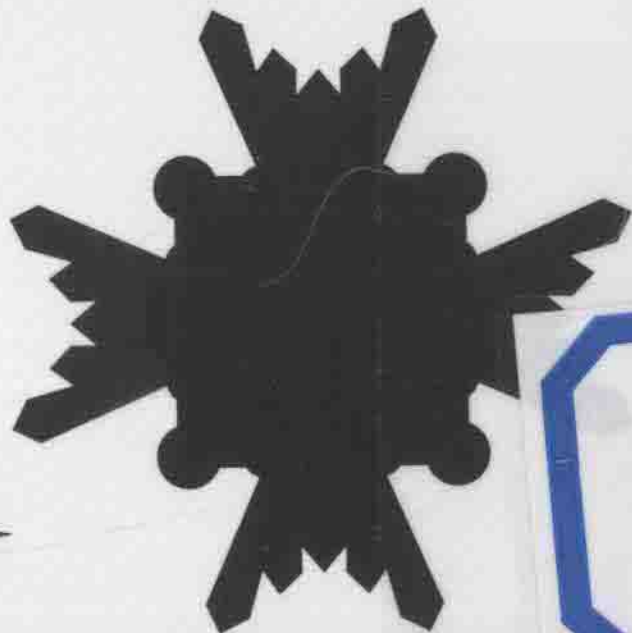
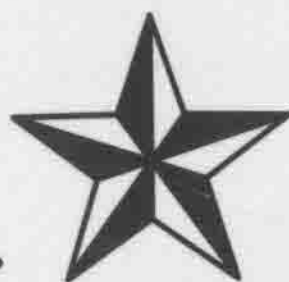
「たられば」の 日本戦争史

もし真珠湾攻撃が
なかったら



黒野 耐

Taeru Kurono





講談社文庫

常州大学図書館
「たおぼ」の日本戦争史
もし真珠湾攻撃がなかったら
蔵書

黒野 剛

講談社

著者 | 黒野 耐 1944年愛知県生まれ。防衛大学校機械工学科卒業。陸上自衛隊入隊。陸上幕僚監部調査部部員、第二特科群長などを経て'99年、陸将補で退官。防衛庁教官として防衛庁防衛研究所に入所し、2004年まで戦史第二部主任研究官を務める。武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部講師を経て、現在、歴史学者、国際政治学者として活躍している。

「たられ^{にほんせんそうし}ば」の日本戦争史 もし真珠湾攻撃^{しんじゅわんこうげき}がなかったら

くろの たいる
黒野 耐

© Taeru Kurono 2011



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2011年7月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-276911-2

「たられれば」の日本戦争史へもし真珠湾攻撃がなかったら

目次

はじめに

6

第一章

日清戦争

北京を攻略していたら

9

なぜ朝鮮半島へ／ロシアならぬ清国と対立／日本の戦争目的
／征清大作戦構想／列強監視下の戦争／直隸平野決戦の予想
図／北京攻略の結果は

第二章

日清戦争後

三国干渉を拒否していたら

27

講和をめぐる列強の動き／露独仏の三国干渉／干渉を拒否し
て戦っていたら／イギリス海軍の支援はえられたか／遼東還
付の意義／イギリスの勧告案で講和していたら

第三章

日露戦争

ハルビンまで攻撃していたら

41

満州から朝鮮に迫るロシアの脅威／日英同盟を盾として／開

第四章

日露戦争後

日米共同の満鉄経営が実現していれば — 67

戦への決断／日本の戦争目的／対露作戦計画／まず遼陽をめざして／戦いの決は奉天で／日本海海戦には大勝したが／奉天会戦後の選択／ハルビンを占領できたのか／最良の選択

満鉄経営権を獲得したが／鉄道王ハリマンの夢／ハリマン仮契約に成功／ハリマンの夢破れる／日米対立のはじまり／日米共同経営がもたらす効用／日米共同経営の未来図

第五章

第一次世界大戦

日本軍欧州派遣へのラブコール — 85

第一次世界大戦の構図／疑惑のなかの日本参戦／欧州の戦況／日本軍派遣への合唱／アメリカの参戦と日本の孤立／なぜ欧州に派兵するのか

第六章

第一次世界大戦

欧州戦場に本格参戦していれば — 103

いずれの戦線に出兵すべきか／欧州派兵は可能か／参戦した場合の様相／陸軍参戦の効果／第一次世界大戦後の世界／異なる第二次世界大戦の構図 — 日米英仏vs.独伊ソ／異なる第二次世界大戦の構図 — 日米英仏＋ソvs.独伊／大戦後の現実

第七章

満州事変

塘沽停戦協定を厳守していれば

123

満蒙における日本の特殊權益／剛と柔の対中国政策／膺懲一撃論と現地解決方式／石原莞爾の戦争構想／同じ穴の貉／消極的な列強と関東軍の暴走／みずから招く四面楚歌／国際連盟の枠内で解決するチャンス／日米全面衝突の境界点／「たられば」が成立しない構造

第八章

日中戦争

「たられば」もない構図

153

日中衝突への途——華北分離工作／国防国策大綱と中国との避戦／事件から戦争へ／蔣介石の抗日戦略／戦略のない一撃論／泥沼の全面戦争へ／全面戦争回避のチャンス／ドイツの和平仲介——トラウトマン工作／「たられば」もない構造

第九章

太平洋戦争前

三国同盟を破棄していたら

175

国際情勢の転機に備える／白紙に戻された中国本土撤兵／不信の日独伊三国同盟／ドイツ勝利の幻想／苦肉の策——日ソ中立条約／三国同盟破棄の効用

第一〇章 太平洋戦争前

初期の日米交渉で妥協していたら

191

アメリカの対日戦略／一度はまとめられた日米了解案／松岡の独善的な交渉／交渉継続か開戦か／勝算も成算もない戦争／ハル・ノートは最後通牒か／日米戦争回避の限界点／初期の日米交渉で妥協した場合のその後

第十一章 太平洋戦争

真珠湾を攻撃していなかったら

209

オレンジとレインボー——対日戦争計画／作戦計画しかない日本の戦争／政略的着眼を欠く真珠湾攻撃／海軍の持久戦思想——井上成美の新軍備計画論／遅すぎた絶対国防圏／真珠湾を攻撃せず絶対国防圏を固守していたら

おわりに

227

参考史料

230

主要参考文献

258



講談社文庫

「たられば」の日本戦争史

もし真珠湾攻撃がなかったら

黒野 耐

講談社

「たられれば」の日本戦争史へもし真珠湾攻撃がなかったら

目次

はじめに

6

第一章

日清戦争

北京を攻略していたら

9

なぜ朝鮮半島へ／ロシアならぬ清国と対立／日本の戦争目的
／征清大作戦構想／列強監視下の戦争／直隸平野決戦の予想
図／北京攻略の結果は

第二章

日清戦争後

三国干渉を拒否していたら

27

講和をめぐる列強の動き／露独仏の三国干渉／干渉を拒否し
て戦っていたら／イギリス海軍の支援はえられたか／遼東還
付の意義／イギリスの勧告案で講和していたら

第三章

日露戦争

ハルビンまで攻撃していたら

41

満州から朝鮮に迫るロシアの脅威／日英同盟を盾として／開

第四章

日露戦争後

日米共同の満鉄経営が実現していれば——67

戦への決断／日本の戦争目的／対露作戦計画／まず遼陽をめざして／戦いの決は奉天で／日本海海戦には大勝したが／奉天会戦後の選択／ハルビンを占領できたのか／最良の選択

満鉄経営権を獲得したが／鉄道王ハリマンの夢／ハリマン仮契約に成功／ハリマンの夢破れる／日米対立のはじまり／日米共同経営がもたらす効用／日米共同経営の未来図

第五章

第一次世界大戦

日本軍欧州派遣へのラブコール——85

第一次世界大戦の構図／疑惑のなかの日本参戦／欧州の戦況／日本軍派遣への合唱／アメリカの参戦と日本の孤立／なぜ欧州に派兵するのか

第六章

第一次世界大戦

欧州戦場に本格参戦していれば——103

いずれの戦線に出兵すべきか／欧州派兵は可能か／参戦した場合の様相／陸軍参戦の効果／第一次世界大戦後の世界／異なる第二次世界大戦の構図——日米英仏vs.独伊ソ／異なる第二次世界大戦の構図——日米英仏＋ソvs.独伊／大戦後の現実

第七章

満州事変

塘沽停戦協定を厳守していれば

123

満蒙における日本の特殊權益／剛と柔の対中国政策／膺懲一撃論と現地解決方式／石原莞爾の戦争構想／同じ穴の貉／消極的な列強と関東軍の暴走／みずから招く四面楚歌／国際連盟の枠内で解決するチャンス／日米全面衝突の境界点／「たられば」が成立しない構造

第八章

日中戦争

「たられば」もない構図

153

日中衝突への途——華北分離工作／国防国策大綱と中国との避戦／事件から戦争へ／蔣介石の抗日戦略／戦略のない一撃論／泥沼の全面戦争へ／全面戦争回避のチャンス／ドイツの和平仲介——トラウトマン工作／「たられば」もない構造

第九章

太平洋戦争前

三国同盟を破棄していたら

175

国際情勢の転機に備える／白紙に戻された中国本土撤兵／不信の日独伊三国同盟／ドイツ勝利の幻想／苦肉の策——日ソ中立条約／三国同盟破棄の効用

第一〇章 太平洋戦争前

初期の日米交渉で妥協していたら

191

アメリカの対日戦略／一度はまとめられた日米了解案／松岡の独善的な交渉／交渉継続か開戦か／勝算も成算もない戦争／ハル・ノートは最後通牒か／日米戦争回避の限界点／初期の日米交渉で妥協した場合のその後

第十一章 太平洋戦争

真珠湾を攻撃していなかったら

209

オレンジとレインボー——対日戦争計画／作戦計画しかない日本の戦争／政略的着眼を欠く真珠湾攻撃／海軍の持久戦思想——井上成美の新軍備計画論／遅すぎた絶対国防圏／真珠湾を攻撃せず絶対国防圏を固守していたら

おわりに

227

参考史料

230

主要参考文献

258

はじめに

歴史学では、「あの時こうしていたら」とか「あの時あんなことをしなければ」とか、すなわち「たられば」を考えてみても仕方がないといわれるが、果たしてそうだろうか。

日本近代の対外戦争を見た場合、日清戦争、日露戦争、日独戦争（第一次世界大戦）、満州事変、日中戦争、太平洋戦争（第二次世界大戦）という流れは否定しようのない歴史的事実である。この歴史的流れを説明することが、近代史の課題であることはいふまでもない。

だが、歴史は人間の主体的意志によつて創造されるという考え方に立てば、人間の意志次第では、現実の歴史の流れとは異なる展開を期待することもできるといえよう。つまり、人間の意志は多元的な要因によつて規定されるため、そこには多様な選択肢が存在し、その選択いかんによつては、別の歴史の流れとなる。

例えば、日本は日露戦争の結果、南満州鉄道（満鉄）の経営権を獲得したが、米企業家ハリマンの提案を受けいれて日米共同の満鉄経営をしていたら、その後の日米中関係は実際の歴史的展開とは異なり、日米戦争には至らなかったのではないかと思われる。

このように歴史には、その流れを大きく変えたかもしれない、選択上の分岐点が横たわっている。現実起こった歴史的事実を否定することはできないが、別の選択肢があつたことも事実である。だからこそ、後世の者が誤った選択をした指導者たちを批判することができし、なぜ彼らはそうしなかつたのかを考えることにより、歴史の教訓を学ぶ意義もあると思われる。

日本を破滅へと導いた戦争責任を追及することは、極めて重要なことであつて、大いに究明すべきである。その一方で、太平洋戦争という悲劇を避けられなかつたのかという視点から、日本の近代の戦争を見つめ直してみることも重要である。つまり、「たれば」を考えてみるのだ。

日米が対立軌道に入っていく結節点としては、まず日露戦争後の日本の大陸政策がある。そして、第一次世界大戦間の日本の対中国政策と、連合国への寄与の問題がある。さらには満州事変、日中戦争と対立が深化していく結節点があり、第二次世界大

戦初期には独伊との三国同盟の締結、仏印進駐などと直接衝突することになる結節点がある。こうした各結節点において、別の選択肢はなかったのかという「たられれば」を考え、別の選択をした場合にどのように展開していったかを推察していくのである。そして、なぜそうしなかったのかという原因を考えてみたい。

この際、別の選択肢が存在したという客観的事実があり、また別の選択から展開する事象を妥当に描くことに注意したい。そして、こうした「たられれば」を推察することにより、知的好奇心を大いに刺激し、肩を張らずに、気楽に推理の輪を広げて楽しんでみたいと思うのである。

第一章

日清戦争

北京を攻略していたら

日清戦争たられチャート

